

## みず(水)のほとり(澁)の物語(伝)

——『雁』の時空間・「池之端御殿」の正確な位置をめぐって——

酒井敏

はじめに

かつて前田愛は『雁』を「地図小説」と呼び、そこには「明治十年代の東京の町並」が「このうえない精密さで復元され」ていると述べた。<sup>1)</sup> 前田にしてそうであるように、今日まで、多くの読者が『雁』には明治一三年の時空間が正確に再現されていると漠然と信じてきたが、実は巧妙に歪められている。本稿では、末造の隣人とされる桜痴福地源一郎の邸(池之端御殿)の位置(住所)を特定し、今日までの諸注釈の誤りを正した上で、そのように設定された理由を考察し、従来とは違った角度から『雁』の一面を照射してみようと思

う。

なお『雁』の時空間には、もう一つの歪み「末造の昌平橋」を軸とする読解によって見えてくる、歩行と都市交通というさらに別の問題系があるが、こちらについては別の機会を待つこととしたい。

## 一 問題の所在

前田は、先の「森鷗外『雁』 不忍池」を、「森鷗外は、時と所の座標軸をシッカリ定めておいてから小説を書きはじめる人だった」と起筆し、以下のような指摘を行う。

『青年』に引きつづいて、『昂』に連載がはじまった『雁』

になると、「測地師」の小説作法はいつそうはつきりしてくる。「地図小説」という言い方が許されるなら、近代小説のなかでも『雁』ほど見事な「地図小説」はちよつとほかに例がない。物語の本筋とはそれほど縁がない場面でも、鷗外の「測地師」の眼は、街並の特性をおどろくばかりの精密さでとらえてしまつたのだ。

待ちつづける女と通りすぎて行く男——お玉と岡田の出逢いの意味をそこまで煮詰めてみると、『雁』のなかにこのうえない精密さで復元された明治十年代の東京の町並もまた、二つの位相に切り分けられていることがのみこめてくるだろう。

そうした風景に心をうばわれているとき、ごく自然におもいだされるのは、やはり『雁』の鉄筆で刻んだような正確無比の描写である。

「街並の特性をおどろくばかりの精密さでとらえてしまつた」「測地師」の眼「が可能にする」「正確無比の描写」によって「このうえない精密さで復元された明治十年代の東京の町並」。

言わば、「地図小説」『雁』には当時の地図が立体的な景觀として再現されているわけだ。ほとんどの読者も、この指摘に同意するだろう。言わば前田は、漠然と信じられてきたことを明確な言葉で定位して見せたのである。

しかし、以下にやや長く引用する通り、実は『雁』の「式拾弐」は従来の注釈と明らかに矛盾する叙述を含む。しかし今日まで、この矛盾が検討された例はない。

坂下の四辻まで岡田と僕とは黙つて歩いた。真つ直に  
 巡査派出所の前を通り過ぎる時、僕はやうやう物を言ふ  
 ことが出来た。「おい、凄う状況になつてゐるぢやない  
 か。」

「ええ。何が。」

「何が何も無いぢやないか。君だつてさつきからあの女の事を思つて歩いてゐたに違ない。僕は度々振り返つて見たが、あの女はいつまでも君の後影を見てゐた。

おほかたまだこつちの方角を見て立つてゐるだらう。あの左伝の、目迎へて而してこれを送ると云ふ文句だねえ。あれをあへこべに女の方で遣つてゐるのだ。」

「其話はもうよしてくれ給へ。君にだけは顛末を打ち

明けて話してあるのだから、此上僕をいぢめなくても好いぢやないか。」

かう云つてゐるうちに、池の縁に出たので、二人共ちよいと足を停めた。

「あつちを廻らうか」と、岡田が池の北の方を指さした。

「うん」と云つて、僕は左へ池に沿つて曲つた。そして十歩ばかりも歩いた時、僕は左手に並んでゐる二階造の家を見て、「ここが桜痴先生と末造君との第宅だ」と独語のやうに云つた。

「妙な対照のやうだが、桜痴居士も余り廉潔ぢやない」と云ふぢやないか」と岡田が云つた。

僕は別に思慮もなく、弁駁らしい事を言つた。「そりやあ政治家になると、どんなにしてゐたつて、難癖を附けられるさ。」恐らくは福地さんと末造との距離を、なる丈大きく考へたかつたのであらう。

福地の邸の板塀のはづれから、北へ三軒目の小家に、つひ此頃「川魚」と云ふ看板を掛けたのがある。僕はそれを見て云つた。「此看板を見ると、なんだか不忍池の

肴を食はせさうに見えるなあ。」

「僕もさう思つた。しかしまさか梁山泊の豪傑が店を出したと云ふわけでもあるまい。」

岡田と「僕」とは、妾宅の前に立つお玉の前を通つて、無縁坂を下つてきた。二人が無言だつたのは「顔が照り赫いてゐるやうな」「いつもと丸で違つた美しさ」の「お玉の目はうつとりとしたやうに、岡田の顔に注がれていた」からである。このお玉の眼差しから「僕」が読み取つた岡田との關係こそ、「巡查派出所」(後掲「関連地図」中の×印。以下、適宜本地図を参照のこと)まで来て、ようやく口にした「凄い状況」に他ならない。

さて、わずかに言葉を交わすと「池の縁に出」る。現在の不忍通りはまだなく、当時のメインストリートは池之端七軒町から岩崎邸の東を抜ける、この「巡查派出所」のある通りだつた。つまり二人は、道路を渡ることなく、直進してそのまま池にぶつかり「ちよいと足を停めた」わけだ。

二人は「池の北の方」、すなわち「左へ池に沿つて曲」がり、「十歩ばかりも歩」く。そこで「左手に並んでゐる二階造の家」が「桜痴先生と末造君との第宅」だと言つ。先の地

図で示せば、池之端茅町二丁目五、六番地の辺りでなければならぬ。この一帯はかつてゴルフ練習場であり、駐車場等を経て、現在は中国料理東天紅上野店のビルが建っている。

ここで、次に掲げる『雁』の岡田の散歩コース（図1）<sup>4</sup>

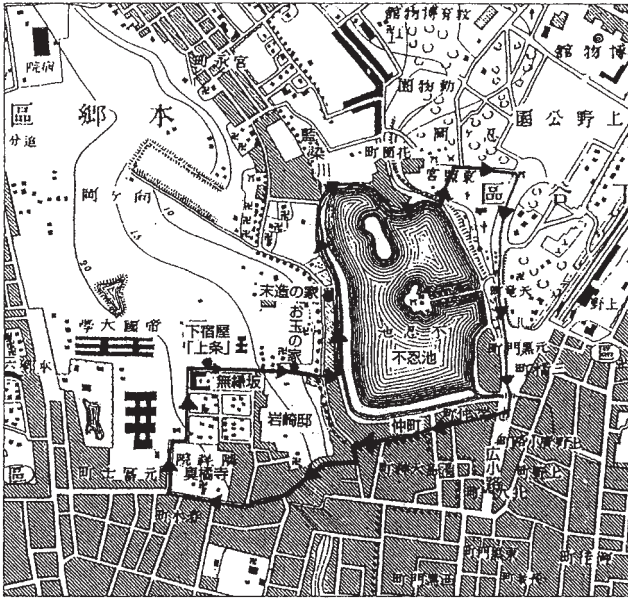


図1 『雁』の岡田の散歩コース

を参照して欲しい。地図中の「末造の家」は、ほぼ現在の定説に従って比定されているのだが、本文の叙述が示す位置からは大きく北に振っている。以下に井上謙の叙述<sup>5</sup>を引用し、定説を確認しておく。

まず地下鉄本郷三丁目駅を出て『雁』に出てくる麟祥院（春日局の菩提寺）へ。そこから少し戻って東大の龍岡門を経て無縁坂に向かう。そこは『雁』の舞台なのでゆっくり下りよう。途中で坂の名の由来となった講安寺がある。坂下が池之端で眼前に不忍池が広がる。都会には珍しい閑静な空間である。不忍池を北へしばらく行くと横山大観記念館があり、『雁』のころは福地桜痴が住んでいた。二階建の日本住宅を活かした記念館なので大観の作品を鑑賞しながらその雰囲気を楽しみたい。

後に「福地の邸の板塀のはづれから、北へ三軒目の小家」と書かれるので、「左手に並んである二階造の家」の南（向かって左）側の家が「末造君」の「第宅」であるはずだが、いずれにせよ、井上が書いているように現在の横山大観記念館＝当時の福地邸とするのが今日の定説である。「末造の家」も、これを前提として（図1の地図ではそのまま記念館の場

所とも見えるが）その位置を決定されていると言えよう。末造は架空の人物だから、現実の地図で住所が特定出来ないのは当然として、桜痴は実在の人物である。先に記した矛盾から、正確な桜痴の住所は池之端御殿の位置を特定する試みがなされるべきだったと思うのだが、今日まで試みられてこなかった。

以下に特定するように、実は池之端御殿の位置は今日の横山大観記念館ではない。今は核心に当たるとの事実だけを指摘するに止め、章を改めて、定説が形成される経緯をたどり、正確な桜痴の住所は池之端御殿の位置を具体的に示そう。

## 二 桜痴の住所は池之端御殿の位置

おそらく、近代文学研究者にとって通説の根拠となっているのは、以下に引く指導・人見圓吉／執筆・二木慶に因る「福地桜痴」の叙述である。

まず「一、生涯」の「口、日報社社長」で、池之端と桜痴の繋がりについて以下のように記す。

（明治七年二月、桜痴の社長兼主筆就任に因って・酒

井注）「東京日日新聞」は面目を一新し、社説中心、政論中心へと大きな飛躍を遂げた。…（中略）…「吾曹先生」の所説は世論を左右するほどの威力をもった。日報社の月給は二百五十円、「池の端の御前」「池の端の殿様」の異名をとったほどの豪奢な生活であった。

桜痴は明治一一年に東京商法会議所副会頭となり、翌年の「第一回府会以来議員に当選して、諭吉（福沢諭吉・酒井注）と競争して議長に就任」するほど府会においても重きをなした。しかし、一四年の北海道開拓使官有物払下事件への対応に失敗して以後、「時代の脚光を浴びて活躍」する地位から次第に転落、二二年七月には社長を退いて正式に日報社を辞職する。「雁」の明治一三年とは、言わば桜痴の全盛期、最後のきらめきを放っていた時期なのだ。

そして、池之端御殿の位置については「五、遺族、遺跡」で、

都電池の端茅町停留所から七軒町方面へ約百米、道の左側にある横山大観の邸宅が、かつて池の端の御殿のあった場所にあたる。

と明記している。「横山大観の邸宅」（当時は存命）は現在の

横山大観記念館（台東区池之端一四一四）の場所であり、大観は明治四一（一九〇八）ないし二（一九〇九）年からここに住んだ。当時は池之端茅町二丁目一九番地である。

しかし、以下に引用する比較的多くの読者を持つと思われる二冊の評伝は、いずれも池之端御殿には言及するものの、その場所を明記していない。

例えば、柳田泉は『福地桜痴』において、

（桜痴は・酒井注）「東京日日」の退社とともに、池ノ端の邸を売り、家資・家財をはたいてしまった

（「第一 明治以後の福地桜痴（十二） 立憲帝政党の組織」）

（明治二年の吉原疑獄事件に比して・酒井注）前の帝政党のときは、負債が出来たとはいつても、まだ時々内閣の大官や道楽仲間を招いて花見の宴を催すぐらいの余裕はあった（彼の家は池ノ端茅町にあり、当時には上野の桜がよく眺められたという）。

（「同（十五） 退社後の生涯」）  
等と記す。後者では、たくさんの桜が咲く邸宅の庭で花見をしている、という記述ではない点に注意したい。実際のこと

ろ、どの程度の敷地だったのか。ただし、次に引く小山文雄『明治の異才福地桜痴 忘れられた大記者』<sup>10)</sup>の記述は、かなりの広さを想像させる。

池の端の殿様、桜痴が日本一の花見会を催せば、伊藤博文・井上馨の貴顕をはじめ、西洲・伯円・円朝といった一流の芸人たちまで勢ぞろいさせられ、柳橋の綺麗どころが座を取りもつ。

（「第四章 文壇と梨園の人 駆けぬける栄光／落日は早く……」）

確かに柳田泉は、

（碑の文中・酒井注）天女池は不忍池で、其故楼というのは、桜痴の池ノ端御殿のあつた下谷茅町の地をいう。後の横山大観の邸となったと聞く。

（「附録第三 桜痴居士福地君紀功碑」）  
と記してはいる。しかし、「横山大観の邸となったと聞く」と伝聞のみで、実証されてはいない。「東京日日」の退社とともに、池ノ端の邸を売ったとしても、大観が住むまで二ないし二年の空白がある<sup>11)</sup>。

それに対して、はるかに具体的なのは長尾正憲「横山大

観旧居」 台東区区民文化財「史跡」として「<sup>12)</sup>」の記述である。

大観がそもそもこの地に居を移したのは、師岡倉天心の指示にもとづいて明治三十九年十一月以来住んでいた茨城県大津町五浦の自宅が失火により明治四十一年九月十一日全焼したためである。九月二十日付、友人南米岳あての手紙には、いちはやく

拜啓 小生昨日上京 下谷区茅町二丁目二十一に仮寓仕候間御都合之節御立寄り被下度 混雑罷在候間 其内拝趨可仕候渡(観) 月橋ヲ西へ渡りて右へ三軒目の二階家二御坐候

と転居を知らせている。…(中略)…ここでは二丁目一と書いているが、二十五日付の松山温徳あて手紙以降では二丁目一九としているから書き誤ったのであろう。

最初は「書き誤った」ものの、大観自身が明確に「二丁目一九」と記しているわけだ。なお、斎藤隆三『横山大観』<sup>13)</sup>所収「年譜」では、この年に「仮寓を得て移転」、翌四二年に「改めて家を卜し本居とす」と二段階で居宅を構えたとしており、新築した四二年を正式の移転の年としている。先に

「大観は明治四一(一九〇八)ないし二(一九〇九)年からここに住んだ」と記した所以であるが、いずれにせよ、大観が自邸をかつての池之端御殿だと認識していた様子は見えない。

因みに、記念館館長横山隆氏(大観令孫)のお話によれば、大観が転居した当時も、まだ不忍池側の道は形ばかりで、表通りは西側(「雁」「拾漆」に言う「七軒町の通」。注3参照)だったとのこと。転居当時の大観邸を、不忍通りに向かって門や玄関のある(東を表とする)現在の横山大観記念館のままいメージしてはならない。

後に大観は、大正七年に二丁目一九番地の「宅地三 坪三合」を当時の所有者後藤長右衛門から買い取り、さらに大正一五年九月に「一八番地二号の宅地一六坪八合三勺」「代金三三、四一三円を買い足し」、その邸宅は「合計四一七坪一合三勺」の広大なものとなる。

因みに東京市に十五区制が敷かれた際に作られた最初の地図の一つ『大日本ノ改正ノ東京全図ノ下谷区ノ十五葉内第十二号ノ実形ノ二千四百分一』(西川光通編・西川光穂出版、明治一一年五月)には、番地界と共に面積が書かれており、茅町二丁目一九番地は正に三 坪三合である。同地図に拠



ると隣の一八番地は全体で一八三坪七合五勺。後述する池之端御殿、実際の桜痴邸は一六番地で一三六坪八合である。

「御殿」と称するにはひどく狭く感じられるかも知れないが、実際には「一八番地二号」とあったように同一番地の中に何軒かの家が建っているのが普通であり、だからこそ「福地の邸の板塀のはづれから、北へ二三軒目の小家」などもあり得た。あるいは桜痴も、大観のように宅地の一部を買い足していた可能性もあるう。

なお、後掲「関連地図」では、参照の便宜を考慮して『明治四十年ノ一月調査 東京市下谷区全図』（東京郵便局、明治四〇年三月。人文社による復刻版）を使用した。が、番地界に変更はない。

さて、前掲長尾文に拠れば、大観邸と池之端御殿との関わりは、以下のように生じてくる。

（大正一五年九月の買い足しで・酒井注）敷地が四割も広くなり、この拡張部分の一角に茶室があったので、その移動工事がおこなわれた。この茶室は明治新聞界の草分けで、のちに文壇一方の雄となった福地桜痴が俗に「池之端御殿」といわれた宏壮な邸内に造ったもの。桜

痴が築地に移居したあと、邸宅を整理したとき譲り受けた人が手離したものとされる。森鷗外の名作『雁』

（大正五年刊）は無縁坂を降りて、盛時のこの福地邸前を散歩する東大学生を描いているが、鷗外に美術解剖学を美校で教わった縁によるのか、この本の口絵に鳥を描いた大観が福地邸内にあった茶室を手に入れたのは奇縁というべきであろう。鉦鼓堂客間の後方に五畳半に床間のある茶室を引いてきて、控室、水屋、押入などを付け足した。客間の後から廊下でつないだが、既設の土塀を片側に利用した瓦敷きの廊下は雅味のあるものであった。（この茶室は京都伏見生まれの静子夫人が愛用したが、空襲で焼失したので現存しない）

ありし日の池之端御殿を偲ぶ縁となる茶室（横山隆氏によると「木賊庵」と称されていた）が失われたのは残念であるが、かつての池之端御殿が大観邸と重ならないことは、このエピソードからも明らかであろう。では、横山大観邸が池之端御殿だとする誤解は、いつ頃生まれたのであろうか。今回確認し得た資料中、最も古い記載は、朝比奈知泉「老記者の思ひ出」三五九頁にある以下の一節<sup>1)</sup>である。



其の頃（桜痴の全盛時・酒井注）居士は下谷池端に棲んでゐて、予は其の家を訪問したことはなかつたが、何でも池端御殿とかいはれてたから、宏壮な邸宅だったらう。其の後屢ば人手に渡り、今は多分横山大観画伯が買取て、普請を仕直し、立派な邸になつてゐるさうだ。

そもそも昭和戦前の画壇に占める大観の地位や大きき、それにふさわしい邸の「宏大」さに、桜痴全盛期の池之端御殿の「豪華」で「宏壮」なイメージが重なつて作り出された一種の伝説だったのであるう。大観が「雁」に寄せた「口絵」も、誤解を定説へと導く一助となつたかも知れない。

池之端御殿を一六番地とする直接の根拠は、桜痴が自ら書いた明治一一年二月二六日付の「日報社創立ノ儀ニ付願」(図2)<sup>15</sup>である。

桜痴の日報社入社は明治七年、当初は主筆で、「社長」と署名するようになるのは、銀座尾張町(図2)には「京橋区尾張町参丁目参番地」とある)の新社屋に移転した明治九年から。内容は「地券並ニ公債証書等八社号ヲ以テ之ヲ所有シ且官途之願窺人民相互ヒ之取引ハ」社名と社長(主任者)名で行いたい、とする一種の名義変更願いのように読め、「創立

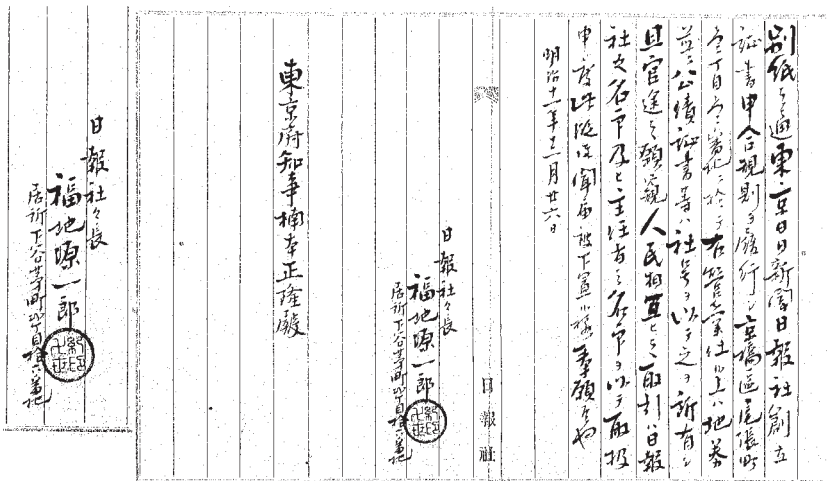


図2 福地源一郎外八名「日報社創立ノ儀ニ付願」

ノ儀」とはいささか奇妙に思えるが、目次に「第六拾二号ノ  
日報社創立ノ儀ニ付願下谷茅町二丁目 福地源一郎外八名」  
とあるのに従った。

署名部分の拡大も掲げておいたが、「日報社々長ノ福地源  
一郎 印ノ居所下谷茅町式丁目拾六番地」と自署している。  
この記載を以て、池之端御殿の位置（桜痴の住所）は「下谷  
区下谷茅町二丁目一六番地」と特定できよう（「茅町」の町  
名は正確には「下谷茅町」）。『雁』の叙述より大きく北に振っ  
てはいるが、やはり大観邸とは重なっていないかったのである。<sup>16)</sup>

当然ながら、大観邸が池之端御殿のあった場所に近かつた  
ことも、従来の説が生まれた理由の一つであろう。仮に、  
未造の「第宅」が実在の池之端御殿の南隣だとすれば一五番  
地。広さは二二坪である。明治一三年の現実に照らせば、  
『雁』の「地図」は歪められていた。桜痴邸は、南隣の未造  
の「第宅」と一緒に不忍池の「西南の隅」の方（先に指摘し  
たように後掲地図の五、六番地辺り。二軒の内、北の家の敷  
地を広く考えるなら、七番地＝二四三坪八合と六番地＝一一  
五坪七合がふさわしいか）へ引き寄せられていたのである。

### 三 みず（水）のほとり（澗）の物語（伝）

お玉の父親は、未造が妾宅探して「氣に入つた」「二軒  
（「伍」の内、お玉にあてがわれた残りの一軒に住むことに  
なつた。それは、未造が

住まつてゐる福地源一郎の邸宅の隣と、その頃名高かつ  
た蕎麦屋の蓮玉庵との真ん中位の処で、池の西南の隅か  
ら少し蓮玉庵の方へ寄つた、往来から少し引つ込めて立  
てた家  
（「伍」

だと言つ。「見晴しがあつて好」（「伍」く、「北向」（「拾壹」  
で「肘掛窓から外を見れば…」（中略）…微かに揺れてゐる柳  
の糸と、その向うの池一面に茂つてゐる蓮の葉とが見える」  
（「拾壹」）と言つただから、正確には示せないけれども、後  
掲の地図で言えば池端仲町の一六番地辺りであろうか。この  
想定は「無縁坂の中段にある」（「伍」）お玉の妾宅から「四  
五町」（「拾」）の距離にあり、未造の家を「家の窓から、指  
さしをして教へ」（「捌」）られる、と記す『雁』の地理と矛  
盾しない。

この、お玉の父親を加えると、『雁』の「地図」がどのよう  
に歪められているかが明瞭になる。桜痴・末造・お玉・お  
玉の父親、この四人は全て不忍池の「西南の隅」を中心とす  
る半径二、三町の円の中に集められていたわけだ。そして、  
この円内には文字通り広大な茅町一丁目一番地<sup>16</sup>「岩崎の  
邸」(「武」)も存在する。資本主義の申し子のような末造に  
とって、岩崎は仰ぎ見るだけで手の届かない遠い憧れだった  
かも知れないが、ここを「遊行する」岡田は、言わば「異人」  
として彼らとは別の価値観<sup>17</sup>「自らの生の原理を持っていた」<sup>18</sup>。

時代の変化に置き去りにされてゆくようなお玉親子も含めて、  
彼らは、この不忍池の滄りの物語のティピカルなヒーロー・  
ヒロインだと言えよう。そうした人々の活躍・葛藤を伝える  
『雁』は、正に水の滄りの物語<sup>19</sup>「水滄伝」だったのである。

寛永寺の山号「東叡山」が「東の比叡山」の意であり、山  
内に「清水の舞台」を設け、さらに不忍池を琵琶湖に見立て  
るなど、そもそも上野周辺は見立てに満ちた場(トポス)で  
あった。不忍池を梁山泊<sup>19</sup>に見立てれば、そこを舞台に物語が  
大きく展開する「武拾武」で「梁山泊の豪傑」に言及される

のは偶然ではない。既に先行研究において『雁』という物  
語の基底にあつて、その最も深い層から物語を支配する力を  
及ぼしている<sup>20</sup>とされた「金瓶梅」が、その第二十四回から  
第二十七回までに描かれる武松・武大・潘金蓮・西門慶の工  
ピソードを原型とする「水滄伝」の衛星小説である通り、実  
は『水滄伝』こそが「その最も深い層から」『雁』の「物語  
を支配する力を及ぼしてい」たのである。しかし、『水滄伝』  
を視野に収めて『雁』を読む試みは今日までなされなかった。

また、今日では評価が低いせいか、繰り返し登場する福地  
桜痴を着眼点とする論も寡聞にして知らない。鳥谷部春汀が、  
独り明治の新聞社会に於て、曾て自ら御用記者たるを恥  
ぢざりしのみならず、自ら御用記者なりと公言して憚ら  
ざりし一人物あり。藩閥政府の文治派を代表して、筆を  
論壇に執ること十有余年。其の立言多くは輿論を敵とし  
たれども、其縦横の文才一代に卓越して、名声藉甚、実  
に当時に並ぶものなかりき。彼は誰れぞや、今は半ば世  
に忘れられたる桜痴居士福地源一郎といふは即ち其人な  
り。

と書いている通り、日報社退社後の桜痴は、明治三四年の段

階で「半ば世に忘れられた」存在となっていた。しかし、「明治」を回顧する風潮が高まりつつあった『雁』の連載当時（明治四四年九月）、作品の進行と並行するように、改めて人々の関心の中に浮上してきていたのである。<sup>(12)</sup>『雁』の「明治十三年」も、当然そうした風潮の中にあり、そこに登場する最盛期の桜痴は、先に見たように間違ひなく不忍池の沿りの物語のヒーローの一人である。そして、その桜痴像は時間の遠近法の下で把握されねばならない。このように、描き出された諸要素を執筆当時の状況と彼此対照することで、『雁』の時空間は、より陰影深く解読されるはずである。

しかし、もはや以上二点について具体的に論述する紙幅はない。本稿では指摘に止め、別稿を期すこととする。

## 注

- (1) 『森鷗外『雁』 不忍池』(『幻景の街 文学の都市を歩く』小学館、昭和六一年一月)。
- (2) 拙稿『解題『雁』』(『鷗外近代小説集』第六巻、岩波書店、二二年一〇月)を参照されたい。
- (3) 「或る日未造は喧嘩をして、内をひよいと飛び出した。…(中略)…直ぐに無縁坂へ往かうかとも思つたが、生憎女中

が小さい子を連れて七軒町の通にいたので」(『拾漆』)と書かれる「七軒町の通」に当たる。ここにいられては、右へ曲がって無縁坂を上る未造の後ろ姿が女中に丸見えになってしまう。メインストリートに面した方が各戸の表だとすれば、現在の印象とは反対に、不忍池側(東)が裏に当たる。このとき、未造は西側にある「内」の表口(「拾伍」の叙述から「玄關」があるのは確かだが、店構えの方も知れない)から「飛び出し」、岡田と「僕」は裏口側を見ながら歩いてゆくわけだ。

- (4) 森まゆみ『鷗外の坂』(中公文庫、二二年九月)P三三。
- (5) 『第二十八章 時の残照』(『東京文学探訪 明治を見る、歩く』(下)『日本放送出版協会、〇二年七月)。
- (6) 佐藤良雄『「雁」のモデルと開成学校・医学校』(『鷗外』4 昭和四三年一月)が、未造のモデルとして、「癌」とあだ名された実在の高利貸し・岡田元助という人物を掲げており、『明治三十七年四月改電話番号簿』(東京郵便局)に次の記載がある。

下谷 九四一番 岡田元助 本郷区湯島天神町三丁目九 雑業

岡田けい 岡田乾児 岡田建蔵 岡田元助 岡田小平 岡田幸吉という並びから考えて、読み方は「ゲンスケ」であろう。佐藤説の当否は本稿の主要な関心事ではないが、仮に元助が未造のモデルだったとすれば、後述するように、彼もまた不忍池の「西南の隅」の方へ引き寄せられていたことになる。

関連地図（以下に拠り作成）

『明治四十年 東京市下谷区全圖』（東京郵便局、明治40年3月）  
一月調査

（復刻東京市十五区・近傍34町村） 下谷区全圖 人文社、使用

『本郷区全圖』（博益社、明治37年10月）

（復刻古地図6 11 『明治三十七年 東京十五区分 本郷区』人文社、使用）



- (7) 私も『鷗外近代小説集』第六巻の注釈では、時間切れで桜痴郎の位置を特定できず、この矛盾にコメントできなかった。東京都公文書館でDVD化された桜痴自筆史料に出会ったのは、本書の刊行から半年ほど経ってからである。
- (8) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第八巻『昭和女子大学光葉会 昭和三年三月』。
- (9) 『福地桜痴「新装版」』（吉川弘文館、昭和六四年二月／初刊昭和四〇年）。
- (10) 『明治の異才福地桜痴 忘れられた大記者』（中公新書、昭和五九年一〇月）。
- (11) 前注10同書「第四章 文壇と梨園の人 駆けぬげる栄光／桜痴終焉」に以下のような記述がある。
- その日（桜痴葬儀の当日、明治三十九年一月八日・酒井注）は朝から晴れわたり、冬には珍しく暖かい日であった。柩は午後一時に芝愛宕町の自宅を出て、電車通りを真直ぐに増上寺に向かった。
- この「芝愛宕町の自宅」の住所は前注6の『電話番号簿』に載る、桜痴の息子・信世の住所から推して「芝区愛宕町二丁目十四」と考えられる。
- (12) 横山大観記念館『館報』一三（横山大観記念館 平成七年六月）。横山大観記念館代表理事兼館長横山隆氏のご教示に拠る。
- (13) 『横山大観』（中央公論美術出版、昭和三十一年一月）。
- (14) 『老記者の思ひ出』（中央公論社、昭和三十一年二月）。
- (15) 東京都公文書館所蔵。原本請求番号609・B6・04（062）。複写元はDVD D217 RAM。筆跡から見て、桜痴自筆の「願」である。
- (16) 既に早く、矢田挿雲が「江戸から東京へ（百四）／池之端の御前」（『郵便報知新聞』大正九年一〇月一九日）に「池之端茅町二丁目十六番地即ち不忍の観月橋と相對せる浅田正吉といふ素封家の邸宅は才人福地桜痴居士の全盛期を送つた古跡」と記し、以下、桜痴盛時の「十六番地」の様子やエピソードを叙述している。初山書店から単行本が出版されて、完成した『雁』が読者に見えたのは、奥付に拠れば大正五年五月一日。この記事は僅かに四年半後であり、刊行当時の同地の様子を伝えていると言つてよい。大観は既に一九番地に住んでおり、「十六番地」はかつての池之端御殿には「浅田正吉といふ素封家」が住んでいた。確かに専ら記憶によつて記され、池之端御殿が「十六番地」だったとする根拠も示されていないが、実は挿雲の記述は正確だったのである。江戸から東京へが、長く広く読まれた書物であることを考えると（架蔵本の内、最も新しい刊記を持つのは「江戸から東京へ（一）麹町・神田・日本橋・京橋・本郷・下谷」〔中公文庫、九八年九月〕である）、通説を疑う手掛かりは早くから存在していたわけだ。
- (17) 竹盛天雄『雁』（稲垣達郎編『森鷗外必携』學燈社、昭和四三年二月）。
- (18) 拙稿『雁』論(1) 末造と岡田の造形をめぐって（『森



『雁』の引用は、『鷗外近代小説集』第六巻に拠り、他は注記した

- 鷗外とその文学への道標”新典社、平成一五年三月）参照。
- (19) 「泊」は「もとも浅い湖水を意味」し、梁山泊は「黄河が氾濫した時にできた大きな水溜まり」で「南北百五十キロ、東西五十キロ」の「わが国の琵琶湖など足もとにもよれない大湖水」だったと言う（佐竹靖彦・梁山泊 水滸伝・108人の豪傑たち 中公新書、九二年一月）。
- (20) 千葉俊二「窓の女」考 『雁』をめぐって」（森鷗外研究”2 八八年五月）。
- (21) 「失敗したる御用新聞記者（卅四年五月）」（『春汀全集第二巻 明治人物月旦』博文館、明治四二年八月）。
- (22) 例えば『太陽 博文館創業二十五週年記念増刊 雄飛二十五年』（一八ノ九 明治四五年六月一五日）などが代表例。同じ博文館の『桜痴全集』（上編・明治四四年一月四日／中編・同一二月五日／下編・明治四五年一月三日）も見逃せない。同じ頃、春陽堂からも全三巻の予告で『桜痴集』が刊行されている（確認できたのは二巻まで）。ただし、博文館版にせよ春陽堂版にせよ、収録されているのは（今日通行の評伝類が全て簡単な叙述で片付けてしまう）戯曲や小説など文学的著作物であって、桜痴の本領である「吾曹」社説など、彼の盛時に発表された新聞論説は収められていない。こうした試みが、明治三九年の桜痴没後、直ちになされたわけではない点に注意を喚起しておく。

出典から直接引用した。漢字は現行の字体に改め、仮名遣いは原文通りとした。ルビ・傍線等は適宜省略している。

本稿成立までに多大なご支援・ご協力をいただいた図書館・資料館、中でも旧通信総合博物館（ていぱく）、東京都公文書館と横山山観記念館・同館代表理事兼館長横山隆氏に厚く御礼申し上げます。最後に、調査の途中経過を待ちかねるようになして聞き、空振りを繰り返す中でモチベーションを高めてくれた元ゼミ生・増田祐希と大脇絵里にも改めて謝意を表して結びとする。

（文学部教授）